

reconquista VI

13/11

e-mail : nishinomiya@xdl.jp fax : 0798-22-7727 〒663-8231兵庫県西宮市津門西口町2-18-201



今村岳司の政策

manifesto

revolution no itulover

文教住宅都市宣言から50年。いまの西宮を愛する人には、
 いまの子供たちが大人になっても愛することのできる西宮を遺す使命があります。
 いまこそ私たちは、西宮の50年を照らし続けた文教住宅都市宣言への敬意を新たに、
 あしたの西宮に対して果たすべき責任を考え直さなくてはなりません。
 50年後の西宮にも西宮を愛する西宮市民がいるはずだから。
 いまのあなたや私のように。

投票とは、まちの未来を決めるために、自分の責任でおこなう、選択です。
 大切な「一票」は、西宮の未来を創る政策に、愛を込めて捧げるものです。
 そのためには、住民はその選択肢をじゅうぶんに知っている必要があります。
 だから私は、朝から晩まで、西宮の未来を創る政策を、愛を込めて配ってきました。

西宮じゅうを歩き回って、みんなが西宮に対して思っていることをきいて回りました。
 涙ながらに怒っていた人、優しく微笑みながら語ってくれた人、日本最高峰の叡智をくれた人。
 みんなの愛を丁寧に紡いで、私の技術で政策に織りあげました。
 この政策は、みんなと私の、西宮への愛の結晶です。

西宮を変えるのは、西宮への愛。

revolution

昭和35年—高度経済成長が始まり、その狂瀾の影にあるものから日本人がまだ目を逸らしていたころ。

時の西宮市長は、西宮の海岸を埋め立てて日本最大の石油化学コンビナートを誘致する計画を掲げました。

この問題を検討する名目で作られた会議で婦人会長はこう言いました。

「西宮の海岸に保存すべきものは今日すでにありません。時勢から見たら当然埋め立てるべきです。」

市政ニュースにはこう書かれました。

「騒音やスなどの公害問題が起こる余地はほとんどない」これが大嘘であることは、直後に四日市で喘息が問題化したことなどを顧みれば明らかです。でも、御用学者で作られた調査委員会は、計画に安全のお墨付きを与えました。

暴走する市長。市ぐるみの嘘。追従する諸団体。何もしない議会。でも、西宮の住民は立ち上がりました。

昭和38年の市長選挙で誘致反対派の市長が誕生し、コンビナート計画は白紙撤回されました。西宮の魅力を犠牲にする不条理な事業ではなく、西宮の恵まれた環境と共生した「教育の品質が高く、住みやすいまち」を創っていくことを、西宮の住民は選んだのです。

辰馬龍雄新市長は就任演説で文教住宅都市宣言をおこなうと言いました。「現在の市民ならびに将来本市に移

り住もうとする人々の大部分は、まず第一に健康的で文化の薫り豊かな明るい緑の街を求める人々であろう。」

このとき西宮は、文教住宅都市を未来に亘って希求すると決めました。そして、当時30万人の西宮は、現在48万人のまちに発展しました。

西宮の礎となった文教住宅都市宣言から50年。その尊い歴史への敬意も未来への責任も忘れ、西宮市政は同じ過ちを繰り返そうとしています。

優しく力強い眼差しで「将来本市に移り住もうとする人々」までもを見つめていた50年前の西宮は、いまの市政をどう見るでしょう。

いまの西宮を愛している人には、いまの子供たちが大人になっても愛することのできる西宮を遺す使命があります。いまを生きる私たちは、西宮の50年を照らし続けた文教住宅都市宣言への敬意をあらたにし、あしたの西宮に対して果たすべき責

任を考え直さなくてはなりません。50年後の西宮にも西宮を愛する市民がいるはずだから。いまのあなたや私のように。

暴走する市政から、文教住宅都市宣言の理想に基づいた公正で持続可能な政治を西宮に取り戻すため、私は「レコンキスタ」を立ち上げました。

いまこそ、私の政策と、あなたの愛で西宮を守るときです。50年前のように。

- 「50年前の文教住宅都市宣言を決めた選挙に、家族が深く関わっていました。あなたのチラシを読んで懐かしく思いました。お話をお伺いしたいです。」という方が私に連絡をくれました。「今年の西宮は“文教住宅都市50周年”などと浮かれているけれど、その精神は完全に忘れ去られています。あなたのような若い人が、その精神に基づいた西宮を取り戻したいと言ってくれて嬉しかったわ。」彼女とお話して、あらためて私はこの美しい西宮に生まれたことを幸せだと思えました。50年前の敬意と欝びに溢れた奇跡の遺したまち、西宮。
- 「レコンキスタとは、昔むかし、異教徒・異民族に征服された土地を取り戻すためにスペインのキリスト教徒が続けた長い戦い「国土回復運動」のこと。西宮は、私たち西宮市民のものです。私は、誇り高い「文教住宅都市宣言」の理想に基づいた、公正で持続可能な政治を、この西宮に取り戻すために立ち上がります。」

reconquista

レコンキスタ — 取り戻せ。私たちの西宮。

manifesto

合理的な説明がつかない政治 一部の利益に左右されない政治
 50年の歴史をもつ「文教住宅都市」を後世に遺す政治
 パラマキで借金を増やさない政治

公正で持続可能な政治を実現し、文教住宅都市西宮を取り戻します。

今村岳司という政治家がいなくなろうが、今村岳司という人間がいなくなろうが、西宮の文化と政治は生き続けます。私は文教住宅都市西宮の歴史のある一箇所で、ある役割を担っているに過ぎません。ですから、西宮の歴史からもらった役割を責任を持って果たし、次代の政治へ繋ぐことこそが、私の使命です。48万人に説明責任を果たせる公正な政治。50年の歴史に敬意を持ち、50年先の未来に責任を持てる政治。私は、そんな、あたりまえの政治を、西宮に必要な政治を、もういちど取り戻します。

まずは unnecessary 大型事業を白紙に。数百億円に上る無駄遣いを止めます。

公務員労組の圧力を廃し、公正でスリムで効率的な行政運営を取り戻します。
 【行政改革】公務員労組との馴れ合いを廃して、効率的で公正な住民目線の市役所運営を実現

市役所を正常化

暴走をストップ

救急医療・小児医療を充実させ、高齢者の在宅療養を可能にします。
 【医療・福祉1】市立中央病院と県立西宮病院との統合で安心できる公的医療を実現
 【医療・福祉2】高齢者の在宅療養を可能にする環境づくり

文教都市に相応しい教育を実現し、子供の育ちにより環境を提供します。
 【教育・子育て1】「文教都市」に相応しい学校環境の実現
 【教育・子育て2】日が暮れるまで外で思いきり遊べる環境づくりと子供を大切に育てるスポーツ・芸術指導

安心して住めてこそその住宅都市。津波・豪雨災害に強いまちづくりを実現します。
 【防災・安全】南海・東南海地震の津波とゲリラ豪雨から住民を守るまちづくり

西宮の課題をひとつひとつ解決するきめ細やかで機動的な政策をおこないます。
 【レコンキスタ西宮の政策ライブラリ】

重点政策

私の提案する政策は、とてもシンプルです。まずはいまの西宮市政を正常化すること。そのうえで、文教住宅都市に必要な施策を実行すること。奇を衒わない、すなおで、堅実な政策です。文教住宅都市宣言が標榜した、未だ色褪せない輝きを放つ政策です。

詳細政策



【選択】

choice



あなたはどんなまちに暮らしたいですか。
 あなたの西宮はどんなまちであってほしいですか。
 あなたの子供や孫にどんな未来を遺してあげたいですか。
 あなたの税金はどんなことに使われてほしいですか。
 言い換えるなら。
 あなたは安くない税金を払って、どんな政策を買いますか？

まちを創るのは政策です。
 その政策を、提案するのは私ですが、選ぶのはあなたです。
 つまり、西宮を創るのは、あなたです。

ゆっくり考えてまじめに選んでください。
 あなたの西宮ですから。

24時間小児救急医療
 高齢者在宅療養のサポート
 余裕のある学校施設
 品質の高い学校教育
 日の入りまで遊べる校庭
 きめ細やかな特別支援教育
 津波浸水を防ぐ防潮堤嵩上げ
 ゲリラ豪雨に耐える雨水対策
 交通不便地区の解消
 西宮の誇る一流の文化・芸術
 ・スポーツの教育への活用
 持続可能な財政・公正な行政

【アサヒビール工場跡地開発計画の大問題】

現在、市はアサヒビール工場跡地約10haのうち3.8haを購入し、市立病院等の公共施設を整備するという総事業費200億円のプロジェクトを進めようとしています。新聞にも市政ニュースにもまるで決定したかのような記事が掲載され、市は既成事実化しようとしています。土地購入も施設整備も決定事項ではありません。この強引な手法はまるで、海岸を埋め立ててコンビナート誘致をしようした50年前の西宮市政のようです（その後住民が誘致派の市長を落選させて計画は白紙撤回、



新市長が「文教住宅都市宣言」をしました。さて、計画の内容も問題だらけです。

最大の問題は莫大な事業費です。総事業費は現在発表されている時点で240億円にもなります。しかも、報告のたびに膨れ上がり、最終的な金額がいくらになるのか想像もつきません。また、施設を整備すれば将来的に建設費の3.5倍の維持費や、さらに多い運営費がかかります。いっぽう、移転する体育館の跡地売却等で事業費の一部を捻出(約28億円)するとされていますが、体育館のある広田小学校校区は児童数激増で住宅開発抑制されていて簡単に売れる土地ではありませんし、広田・大社地区の重要な避難所(阪神大震災の折には天皇陛下も慰問に来られた)でもあります。

次に問題なのは、そもそも無理に市立病院を存続させたいがための事業であるために、合理性も夢もない計画になっていることです。市立中央病院は、公的な役割をじゅうぶんに

果たせていないうえに法外な人件費のせいで莫大な赤字を垂れ流していることから、議会でも存続を疑問視する声が上がっていました。そこで、公務員労組の圧力を受けて「公務員の厚遇を保障するための病院存続」のために、計画を強引に進めようとしたのです。計画が「病院ありき」から始まっているため、この事業が他の事業に優先される合理的理由が不足していますし、この場所が津波被害予想地区でありながら防災公園を作ろうという計画(のちに盛土をすると計画修正)であることなど、計画の杜撰さが目立ちます。

今どき巨額の税金を投入して公共施設整備など、市内外から時代遅れと呆れられています。一般的でない用地取得スキーム(跡地全体を取得した民間事業者から買い手の地位を無償譲渡)の理由も不透明で、市長を含む数名の幹部だけで検討されている事業推進には、役所内部でも疑問の声が上がっています。

【市立中央病院移転新築計画の大問題】

この事業の中心は、病院の移転新築計画です。しかしながら、発表された新病院の計画は、西宮で公的医療が果たすべき役割からすれば的外れですし、現在と同じ257床という中途半端な規模の公立病院を新築しても市内医療環境の向上には繋がりません。この計画についても、土地の取得の件以上に市内外の医療関係者を含む多くの住民から、事業の意義を疑問視する声が上がっています。

高額な中央病院職員の平均月額給与

職種	平均月額給与	人数	属性
看護師	575,219円	40名	民間
看護師	392,475円	37名	民間
医療技術職	602,703円	39名	民間
医療技術職	440,758円	39名	民間
医療技術職	428,717円	37名	放射線技師
医療技術職	384,008円	37名	臨床検査技師
医療技術職	328,508円	31名	理学療法士 作業療法士

※市立中央病院職員(1)地方公共団体職員(2)地方公共団体職員(3)地方公共団体職員(4)地方公共団体職員(5)地方公共団体職員

中央病院の人件費は年間約30億円。中央病院には毎年10億円以上の税金が投入されていますが、人件費に消えているようなものです。住民が必要としているのは医療の提供であって、異常な人件費の公立病院ではありません。(医療をどうするべきかについて詳しくはp14【医療・福祉①】の項目をご参照ください)

【不必要な大型事業は白紙撤回すべき】

「公共事業で市長としての名前を残したい」「公務員の厚遇を保障したい」そんな目的のための事業に巨額の税金を使うようなことは、ただちにストップしなくてはなりません。まだ何の契約も結ばれていませんので、いまから計画を白紙撤回しても違約金や賠償は発生しません。市が取得しない場合に危惧すべきことは、この土地にマンションが建った場合(最大1500戸・18学級ぶん)の津門小学校の

教室不足問題です。それに対応するために、学校のグラウンド兼公園用地として1ha程度の土地を取得(約18億円)し、歩行者専用トンネルで線路北側の深津小・中学校と繋ぐ(工事費2~3億円)ことも考えられます。そのうえで工場跡地を深津小学校校区にするのです。そうすれば深津小・中の校地拡張と公園整備を実現すると同時に、津門小学校が教室不足になることを防ぐことができます。よほど低予算で実現できる政策です。

体育館は現地で建て替えできますし、消防署は隣接の市営住宅用地(すでに住民の半分以上が移転を終えている)があります。病院についてはありかたから考え直すべきです。

政策課題に対しては、最も簡潔で最も効果的な施策をとるべきです。240億円あれば解決できる政策課題はたくさんあります。不必要な大型事業は直ちに白紙撤回すべきです。

【いまそこにある大問題】 まずは不必要な大型事業を白紙に。数百億円に上る無駄遣いを止めます。

「アサヒビール工場跡地を購入・市立中央病院移転を含めた公共施設整備」 - 市当局はまるでこの事業実施が決まったかのような報道をして既成事実化しようとしています。「残念ながらも決まっちゃったんでしょ」と言われますが、安心してください。まだ何も決まっていません。

最初は200億円といった事業費は、報告を受けるごとに膨れあがっていきます。そんなお金があれば、たくさんの政策課題が解決できます。まずはこの事業を白紙撤回します。ちなみに、まだ何の契約もおこなわれていませんので、補償なども必要ありません。

【依然、危機的状況にある西宮の財政】

一般会計歳出1,576億円（H24決算・以下同様）の西宮市の借金は2,486億円に上ります。しかも、平成20年には258億円だった扶助費（福祉支出）は、平成24年には1.5倍の398億円に膨らみ、高齢化の進行によって今後も大幅に増加していきます。さらには、耐用年限が迫る施設整備経費の増加も予測されていたりと、支出は増加していきます。

※市債残高+債務負担行為残高+企業債繰出見込+退職手当引当金等

西宮市の経常収支比率は95.1%と、非常に硬直した状態です。家計に喩えると「収入の95%以上が食費・ローン返済・学費・光熱水費などで消える」ということです。

※使える財源に対する「必ず出ていく経費」の割合

西宮市の危機的な財政状況を改善する方法は二つしかありません。一つは市の事業を取

捨選択して「優先順位の低い事業」をカットすることです。いまの西宮市は「市長が興味のある事業」「市長の実績としてカタチの遺る事業」「市長の支援者の利になる事業」を増やすばかりで、文教住宅都市の目指すべき方向から外れた無駄の多い予算をつくっています。挙げ句の果てに数百億円の巨費を投じての公共施設整備事業…。合理的な判断によって、文教住宅都市西宮が目指す方向性や、現状の課題の解決のために、力を入れるべき政策分野を明確化するべきです。

そして、もう一つは、332億円（年間予算の約1/5）を占める人件費を削減することです。

【技能労務職の給与と適正化、採用中止】

西宮市職員、特に公用車運転手・清掃職員・学校用務員・電話交換手・給食調理員などの技能労務職の給与は、民間同職種の倍近く、ノ

職種	西宮市	民間
高額の西宮市技能労務職の平均月額給与		
廃棄物処理業従業員	483,781円 (44.3歳)	290,600円 (44.8歳)
調理士	411,784円 (45.1歳)	259,200円 (41.8歳)
用務員	469,959円 (49.1歳)	209,700円 (53.8歳)
自動車運転手	560,854円 (50.3歳)	294,000円 (57.1歳)

※西宮市は平成24年度「給与実態調査アンケート」民間は同年度「賃金実態調査本邦統計調査」平成24～25年度平均

ノ国と比較しても1.38倍にもなり、全国屈指の高水準です。地方公務員法第24条の3には「職員の給与は、生計費並びに国及び他の地方公共団体の職員並びに民間事業の従事者の給与その他の事情を考慮して定められなければならない」とあります。西宮市職員の給与水準は、もはや法律上問題のあるレベルなのです。政府も重大な問題ととらえ、「国に準じて必要な措置を講ずるよう要請する」という閣議

決定まで出していますが、あろうことか市長はこれに対して「断じて許すことができない」と反発、「給与が高くていいじゃないか」と職員訓示で聞き直してみせました。いよいよ、世間常識とのズレは拡がる一方です。

そもそも、民間が低コストで高品質なサービスを提供できるこれらの業務の従事者を、役所が直接雇用する必要は何もありません。そのため、全国で民間委託が進められていますが、西宮では全国と逆行し、長年凍結されてきた技能労務職採用が、現市長から再開されました。給食調理員に続き、清掃職員も採用が再開されています。技能労務職1人の生涯賃金は2億円以上。いまの民間費だけの問題ではないのです。

【市長と組合の馴れ合い体質を打破】

西宮市では、「役所出身の市長」と「楽し

て厚遇を守るために活動する公務員労組」の馴れ合いのせいで、他市であたりまえの改革が阻まれ、市役所は住民の常識の通じない厚遇天国になっています。そして、現市長になって公務員労組と市当局の馴れ合いには、さらに歯止めがかからなくなりました。

問題は、技能労務職の給与と採用だけではありません。西宮市の人事評価には実績や勤務態度が考慮されず、ボーナスも一律。昇進しなくても給料は上がり続けるため、優秀な若い管理職より、能力の低い年長のヒラの方が給与が高いケースもザラです。大多数の職員はこのような状況に疑問を感じつつも、閉鎖的な組織の中で声をあげられずにいます。いろいろな分野での民間活力導入を頑なにしようしないのも、異常な給与費比率の市立病院の存続に躍起になるのも、すべては公務員労組の既得権を守るためです。公務員労組は「民は利益優先・安全軽視」

とよく言いますが、とても失礼でデタラメな話です。競争に晒される「民」こそ「利益優先・安全軽視」などをすれば信用を失い、大変な損害に直結します。公立保育所民営化、公立幼稚園統廃合、学童保育への民間活力導入…いつも、このデタラメで住民や保護者は混乱させられてきました。

市長が公務員労組との馴れ合いを断ち切らなければ、効率的で公正な住民目線の市役所運営は実現しません。市長は、3,000人の職員のマネージャーであり、1,500億円の予算で48万人にサービスを提供する経営者です。市役所勤めの出世の延長としての名誉職ポストではありません。20年以上続いた市職員出身の市長では絶対にできないのが、この「市役所改革」なのです。

【行政改革】公務員労組との馴れ合いを廃して、効率的で公正な住民目線の市役所運営を実現

公務員労働組合と市役所出身の市長の馴れ合いによって、西宮市は全国でもトップクラスの「公務員厚遇天国」になりました。組合の抵抗でできなかったあらゆる行政改革（人件費圧縮・民間移管）を急ピッチで進めなければ、危機的な西宮の財政状況は改善できません。

効率的で公正な住民目線の市役所をつくるためには、この馴れ合いを完全に断ち切る必要があります。市役所出身者が副市長（助役）になりそして市長へ閉鎖された組織の中の出世の延長にある経営感覚のない市長には絶対にできない改革です。

【公立病院の果たすべき役割】

総務省は、公立病院の果たすべき役割として「民間医療機関による提供が困難な医療」と示しています。公立病院は、税金を投入する以上、救急医療や不足医療（西宮なら分娩可能な産科など）を提供し、西宮の医療の課題を解決できなければいけないのです。

現状の中央病院は、救急医療の中でも特に重要な心筋梗塞と脳卒中に対応できません。そのようなこともあり西宮の2次救急（入院の必要な救急）はやや不安定で、3次救急（生命に危険が及ぶ重篤）の病院である県立西宮病院（400床）と兵庫医大病院（1000床）に負担をかけがちです。

【不十分な小児医療】

小児医療はこの10年で大きく様変わりし、

24時間365日救急医療が提供できる地域小児医療センター（大きな小児科を有する病院）と、時間外診療（急病センター）の役割が増えてきています。尼崎市などでは、この二つが整備されているため、いざという時にどこを受診したらよいかかわからないということはありません。しかし、西宮では残念ながらどちらも不十分です。

西宮の小児救急は小規模な小児科のある病院が交代で対応（輪番）しています。いまや、ある程度の規模がなくては病院小児科の機能を果たすことは困難になっていますし、一般小児医療と新生児医療、どちらにも毎日24時間態勢で対応するには20人の小児科医が必要とされています。そのような「ここに行けば大丈夫」という病院がないため、兵庫県立塚口病院（尼崎市）や兵庫県立こども病院（神戸市須磨区）へも市内で対応できない患者が数多く罹っています。また急病センターに関

しても、応急診療所（JR西宮駅近く・消防署の奥）はありますが、深夜帯に対応しておらず、阪神北広域こども急病センター（伊丹市）や神戸こども初期急病センター（神戸市中央区）への西宮からの患者が増加しています。

【じゅうぶんな公的医療を提供するためには県立病院との統合しかない】

中央病院が「西宮で行政が提供すべき医療」を提供できていないのは、現在の200床という中途半端な規模が最大の理由です。急性期の医療や最新の高度医療は大型病院・地域に密着した医療の提供は開業医」という棲み分けが進むなかで、総合病院でありながら257床という規模では、「高度な医療ができないために医師・医療スタッフが確保できない」「高額な医療機器がペイしない」「診療料を絞らざるを得ない」などの理由で、

公的医療をじゅうぶんに担うことは不可能です。全国でも200床規模の公立病院は医療スタッフ不足で運営できなくなっていき、少なくとも300床、安定的な運営には500床が必要とされています。だからこそ、尼崎では県立尼崎病院と県立塚口病院が統合して、平成26年から730床の新病院になるのです。

そこで、市が単独で新病院を新築するのではなく、県立西宮病院との統合を検討すべきなのです。県立西宮病院じたいも手狭で、規模を拡張したいという思いがありますが、隣接して県の土地があるわけでもありません。そこで、市が持っている周辺の土地を提供して県立西宮病院を拡張し、そこに現在の市立病院を機能統合するべきなのです。

県立西宮病院と中央病院を統合すれば、経営も効率化され、西宮に必要な公的医療を提供できる規模の病院が実現します。高額な医療機器の導入も可能になり、そうなれば優秀な

市の土地を活用して県立病院を拡張（下図緑の土地が市の土地）



な医師も確保しやすくなります。規模の拡大によって、これまで述べてきた西宮の医療の課題を解決できることになり「あの病院があるから大丈夫」という安心感を担保できる病院になることができます。

現在の県立西宮病院の救命救急センターは非常に高い実績を持っているから、これを強化することで、トリアージする「ER」の実現の可能性も出てきます。また、二つの病

院の小児科を統合するならば24時間小児救急の実現の可能性もでてきます。

※あらゆる救急を一手に引き請けて、重症度と緊急度で患者を分別し、治療や搬送先の順位を決定すること

【市立病院存続ではなく医療の充実を】

西宮では、中堅・中小の病院・診療所はすでにじゅうぶん足りており、257床の市立中央病院を移転新築しても、西宮の医療課題は何ひとつ解決しません。

「医療サービスの充実」は、まちづくり評価アンケートでも、期待度1位の政策分野です。住民が期待しているのは「医療サービスの充実」であって「市立病院の存続」ではありません。市立中央病院単独での新築移転は白紙撤回し、西宮の医療の課題を解決する公的医療を提供するため、県立病院との統合を視野に置いた議論を開始すべきです。

【医療・福祉①】市立中央病院と県立西宮病院との統合で安心できる公的医療を実現

「医療サービスの充実」は、まちづくり評価アンケートでも期待度1位の政策分野です。でも、いまの行政は中央病院を移転新築することはかりにご執心。計画にある257床の病院ができて、いまの西宮の医療の課題は、何も改善しません。

これからの公立病院に求められる公的な役割（例えば「小児24時間救急」など）を果たすためには、優秀な医師の確保・最新の機器の導入などの面で、規模の拡大が不可欠です。そのためにも、県立西宮病院（400床）との統合を視野に置いた政策しかありません。

【在宅療養の推進は大きな社会的課題】

特別養護老人ホームなどの施設待機者の増加が大きな問題となっています。これは、施設で過ごすことを希望する高齢者や施設での医療やケアが必要な高齢者だけでなく、「在宅療養を希望しているが、それが困難であるため仕方なく施設への入所を検討している」という人がたくさんいることのあらわれです。

西宮市の調査によると、「将来希望する介護・生活の場」の1位は「現在の居宅」の54.3%となっています。「できれば愛着のある自宅で過ごしたい・看取られたい」というのは高齢者の大きな願望です。住み慣れた自宅で老後を過ごすことを希望する高齢者が、入院・入所せず在宅療養する可能性を向上させることは、介護予防の観点からも重要です。

「家族の手を煩わせることなく、最期は病院や施設で過ごしたい」という人もいます。

いっぽうで、「愛着のある自宅で間際まで通常の生活を営み、最期を迎えたい」という人もいます。行政の責任は、選択肢を保障することです。「施設への入所の必要があり、その希望もある」という人に対しては施設整備という施策が必要です。いっぽうで、「在宅療養を希望しているにもかかわらず、（現実的に無理だから）施設入所を検討するしかない」という人たちに対しては在宅療養という選択肢を保障することが必要です。

在宅療養の推進は、高齢者の最後の希望を叶えるだけでなく、医療費を含む社会保障費や施設需要の増大に対応し、超高齢化時代を乗り切る持続可能な福祉のためにも必要な施策です。国民医療費は年々増え続け、いまや37兆円を超えるまでに膨れあがっています。この医療費の増加の一つの理由は入院期間が長いということです。全国平均で32.5日、これは、アメリカの6.2日、ドイツの9.6日など

と比べると際立って長い期間です。在宅療養が困難という理由で入院する「社会的入院」が医療費増大に拍車をかけており、この視点からも、在宅療養を可能にする体制の充実は今後大きな課題となってきます。

このような状況を改善するために国は療養病床を削減する計画を発表しました。これは、国が在宅療養を重視する政策に大きくシフトしたことを示しています。これらは政府での対策を待たれる部分も多いですが、住宅都市西宮で在宅療養の選択肢を保障するために、市が努力するべき点もあります。

【医療・介護の地域ネットワークの形成】

在宅療養を可能にする環境作りの肝は、在宅医療体制の整備です。国の方針もあって、「急性期の医療や最新の高度医療は大型病院、地域に密着した医療の提供は開業医」という

棲み分けが今後進むことになります。

2025年には年間死亡者数が160万人を超えると推計されています。在宅→病院、そしてそのまま入院か施設に送られて最期を迎える、というのではなく、「在宅→病院→施設→在宅での看取り」というサイクルをつくりあげなければ、いくら病院に最新の医療設備を揃えても、病床は終末期の患者で満床となり、ほんとうに救急医療を要する患者は入院することができず、たらい回しになります。それを解決するためには、病院を退院したあとの安心できる受け皿＝在宅療養が必要なのです。

そのためには、市を地域ブロックに分けて、そのブロックごとに病院・開業医・看護師・理学療法士・介護福祉士のネットワークを構築し、そのネットワークが高齢者・患者の情報を共有できるシステムをつくり上げる必要があります。その体制がなければ、「点滴をしながら寝ている」「軽いリハビリのみを行

う」という自宅でも可能な日常的な治療からターミナルケアまでのサポートを24時間365日切れ目なく在宅でおこなえる環境を整備することができません。

これを実現するためには、市から医師会に丸投げするのではなく、福祉情報を持っている市が主導権を握り、医師会の協力を得るかたちでおこなうべきです。また、深刻な問題となっている介護従事者の待遇改善をおこない、人材を集める工夫をすることも必要です。

※終末期ケア。痛みや死への恐怖を和らげるなど、残りの人生を充実させることを重視する。

【見守りの充実と情報の周知】

在宅療養に不可欠なものは、これまで述べた医療やサービスの充実だけでなく、なんと言っても「見守り」です。そこで、地域のボランティアのみならず、高齢者の異変に気

付きやすい宅配事業者などと地域包括支援センターとの連携で高齢者の地域での暮らしを見守る体制の推進が求められます。

あとは、複雑な福祉制度や、施設での高齢者虐待などについて気軽に相談できる窓口の周知が重要です。相談や支援をしている「高齢者あんしん窓口」や「成年後見制度」の存在すら知らないために、じゅうぶんな福祉を受けられていなかったり、施設の問題でかえって悲しい思いをしていたりする高齢者がたくさんいます。

※認知症などで判断能力の不十分な人を保護するために、法律行為を代行したり助けたりする人を専任する制度

西宮は住宅都市です。「安心して暮らせること」は最優先の政策分野です。安心して暮らし、老い、最期を迎えられるまち、いまわの際に「最後まで西宮で暮らせてよかった」と言えるまちを目指して医療・福祉政策の充実を図らなければなりません。

【医療・福祉②】 高齢者の在宅療養を可能にする環境づくり

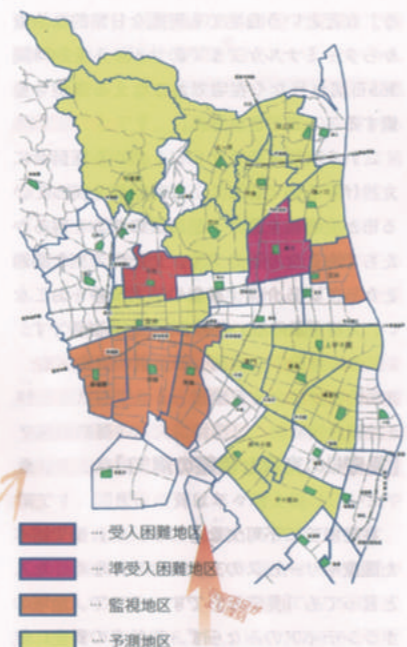
「一秒でも生命を長く延ばすこと」がほんとうの「長寿」でしょうか。私は、「老いても病んでも、自然な幸せを感じながら暮らし、最期を迎えること」こそが「長寿」だと思っています。

そんなあたりまえのことを「キレイゴト」ではなく「明確な目標」にする福祉に挑戦したいのです。「さいごは畳の上で死にたいなあ」…そんなお年寄りの最後の希望を叶える力強さこそが、ほんとうの優しい福祉だと思っています。

【西宮の学校施設不足は深刻】

西宮市は文教都市です。しかし、西宮の学校教育に対する住民の満足度は決して高くありません。教育にいいと思って引越してきたのに、プレハブの仮設校舎に詰め込まれ、相次ぐ学級崩壊に休職する先生…。現場の先生たちは増え続ける学校の課題に必死で対応していますが、肝腎の西宮市は文教施策を重要施策とは位置づけてきませんでした。

まずそもそも西宮市では、学校施設が圧倒的に不足しています。規模の近い他市の小学校1校あたりの児童数は約500人であるのに比べて西宮は平均719人、約1.5倍の児童を学校に詰め込んでいます。そのため、個々の児童・生徒に目が届きにくくなっています。市内40小学校区のうち19校区で業者に開発自衛を求める要綱が適用されています。狭い運動場を休み時間に区分使用している学校が8校。



運動会を自校で開催できない学校や、音楽会を2部・3部制で開催せざるを得ない学校まであります。ほんらい、じゅうぶんな学校施設を整備することが行政の責任ですが、市の対応は、プレハブ仮設校舎の設置と業者への開発自衛要請という場当たり的なものです。

高木小学校に関しては、昨年9月に私が議会で取り上げたことを受け、学校が新設されることになりましたが、最も教室不足が深刻な大社小学校では、市が平成20年に校区変更を強行したことによって地域コミュニティが崩壊の危機に瀕しています。校区変更の強行から年月が経ってしまわないうちに、学校の規模を拡張するとともに、地域とじゅうぶん協議した上で校区変更を撤回、分断された校区を回復しなくてはなりません。

文教住宅都市を謳いながら、学校整備が遅れていることは恥すべきことです。校地を取得して学校の施設不足を解消するべきです。

そもそも、西洋で教会がそうであるように、日本では小学校が地域の中心的な存在です。将来、少子化して空き教室が発生すれば、地域集会所などに用途転用し、代わりに古い施設を廃止していけばよいのです。これには、学校と地域の関わりを密接にする効果もあります。このような「学校の整備推進→地域集会所の学校への集約→用地を転売して整備経費に充てる」という施設整備方針を明確にしなければなりません。

【先生たちが教育に集中できる環境を】

いま、学校現場・教員は完全にキャパシティオーバーです。より深い教材研究やきめ細やかな児童・生徒への指導に、力を入れたくても入れられないのです。

その理由のひとつは、モンスターペアレントなどへの対応に多大な時間や労力を割かれ

ていることです。専門家も、昨今の学校の根本的な問題は生徒指導業務の肥大化にあると指摘しています。学校が際限なく無理難題を受け入れさせられているのです。

こういったトラブルを学校現場に押しつけたままにしては、教員は大多数の児童・生徒への対応が疎かになり、結果として教育の品質が低下してしまいます。それを避けるため、市役所（教育委員会）に生徒指導経験豊富な教員、弁護士、企業のクレーム対応専門家等による組織を設置し、学校と協力して課題解決・対応にあたり、配慮を要する子供の対応をしたりする必要があります。

学校現場のキャパシティオーバーの原因はそれだけではありません。もう一つ深刻なものは、現場での「アンケート回答」「管理作業」「文書作成」などの事務作業の多さです。役所が学校現場を管理するためなどに事務を増やし、そのために教員が児童・生徒に向か

い合う時間を減らしているなら本末転倒です。学校現場でおこなわれている事務作業を再検証し、不要な事務を省く必要があります。

【教育委員会から学校現場に職員を配置】

教育委員会が学校現場の問題をリアルタイムで把握できていないことも大きな問題です。現場が問題教員や学級崩壊等の現状を隠そうとする隠蔽体質によって、課題解決が遅れたり深刻化したりする例が多発しています。これを防ぐため、学校の状況を把握して課題を処理したり、教育委員会にサポートを要請したりできる職員を配置することで、学校の課題対応能力を向上させる必要があります。

何か目新しいことを取り入れるより、学校現場の課題を教育委員会が把握して処理することで、教員が教育に集中できる環境をつくれれば、確実に西宮の教育の品質は向上します。

【教育・子育て①】 「文教都市」に相応しい学校環境の実現

他市の1.5倍の児童を小学校に詰め込んでいる西宮市。学校がそもそも不足しています。文教住宅都市なら、あらゆる施設整備の中で学校は優先されるべきです。小学校は地域の中心ですから、少子化すれば各種公共施設を学校に集約していくのが合理的です。

学校現場の課題と責任をそのまま学校現場に押しつけてきたために、学校や先生たちは完全にキャパシティオーバーです。「教育の品質を上げたい」ならば、行政はとにかく学校現場の負担を軽減し、先生たちが子供に向き合える余裕を生み出すべきです。

【放課後事業を整理し、全校で校庭開放】

犯罪の凶悪化などによって、子供だけで自由に遊べる環境が失われてきています。下校時刻以降の校庭利用は基本的に認められていませんし、公園に行っても「ボール遊び禁止」などと書かれていたりします。せっかく友達と公園にいるのに、お互い黙ってゲーム機…。日が暮れるまで泥だらけ傷だらけになりながら遊ぶことができる場所、そんなあたりまえだったものが失われていっているのです。

放課後の受け皿としてある留守家庭児童育成センターも、多くの問題を抱えています。そもそも原則的に4年生以上や共働き世帯以外の児童は利用できないという問題があります。また、現在の運営では「子供を預かる」という発想から抜け出すことができず、ニーズに合った学びや機会を提供する内容になっていないといえます。

また、学校と管轄が違う（学校は文科省・育成センターは厚労省）せいで、責任問題が足枷となっており、「授業が終わったら一度家に帰ってからセンターに」「センターの子は学校施設を使用しちゃうダメ」のような「縦割り行政の弊害」も問題です。

	施設	校庭
15:30	(授業)	
16:00	曜日別カリキュラム	
16:30	地域ボランティア教室	校庭開放
17:00	宿題	
日の入り	順次、下校or校庭へ留守家庭児童はフリータイム	下校

「放課後子どもプラン事業」プログラムイメージ（平日）
土曜日・長期休暇は「随時来校～10時からカリキュラム・校庭開放～日の入り終了」

学校の校庭を安全で自由な遊び場として活用するため、「留守家庭児童育成センター・児童館・放課後子ども教室・校庭開放」などとばらばらに運営されている事業を一本化し、施設でのカリキュラムや宿題と、日の入りまでの校庭開放を並行しておこなう「放課後子どもプラン事業」をおこなうべきです。

施設でのカリキュラムには、通常の国語・算数に加え、いまの子供の実情をふまえた「体育」や、特に西宮でニーズの高い「英語」なども想定しています。また、土曜日や長期休暇などには、地域ボランティアの協力による読み聞かせや将棋や書道などの教室も組み込まれればよいでしょう。



この事業は、民間事業者が指定管理者として受託し、運営の核となるコーディネーターを中心に校長や地域と連携を図りながら運営していきます。コーディネーターの下には施設と校庭のそれぞれに責任者を置き、カリキュラムの指導員は学校を巡回して指導します。学校施設の安全管理に関しては、規則改正によって放課後の施設管理の責任者を校長から市に移管し、学校に負担をかけることなく、市が責任を持つようにします。この構想は、現在の育成センターにかかっている経費（施設あたり年間平均約2,000万・ほとんど直営のため高コスト）とほぼ同額で実現可能です。

また、土曜日や長期休暇などには、地域ボランティアの協力による読み聞かせや将棋や書道などの教室も組み込まれればよいでしょう。この事業は、民間事業者が指定管理者として受託し、運営の核となるコーディネーターを中心に校長や地域と連携を図りながら運営していきます。コーディネーターの下には施設と校庭のそれぞれに責任者を置き、カリキュラムの指導員は学校を巡回して指導します。学校施設の安全管理に関しては、規則改正によって放課後の施設管理の責任者を校長から市に移管し、学校に負担をかけることなく、市が責任を持つようにします。この構想は、現在の育成センターにかかっている経費（施設あたり年間平均約2,000万・ほとんど直営のため高コスト）とほぼ同額で実現可能です。

【子供を大切にスポーツ指導】

過密スケジュールや科学的でないトレーニングなどによって、子供が怪我をしたりスポーツ嫌いになってしまったりしては意味がありません。科学的な知識を持つ大学やトップアスリートと協力して「西宮スポーツ指導者ライセンス」を創設し、学校やクラブで体育指導にあたる指導者に科学的な指導知識を身につけてもらうことを推進します。ライセンスを指導の必須条件にしないまでも「子供を大切にスポーツ指導」がクラブを選ぶ基準の一つになることを期待しています。

また、トップアスリートを組織し、ゲストコーチとして学校や放課後事業、部活やスポーツクラブに派遣する事業を実施します。普段と違う指導を受けたり違うスポーツを楽しんだりすることで、豊かなスポーツへの興味と健全な育ちをサポートします。

【文教住宅都市に相応しい芸術指導】

日本は世界で最も子供がピアノを習っている国でありながら、大人になってからピアノを弾く人の数が多くありません。その原因は、子供のころのピアノ教室が厳しすぎてピアノが嫌いになる子供が多いことにあるそうです。スポーツも芸術も、子供のころに重要なことは厳しい鍛錬より、楽しむことや興味を拡げることです。そのために、西宮芸術文化協会の芸術家を、市内学校の授業や放課後事業に派遣して出前教室を実施します。

戦前の西宮は、日本全体の芸術文化に大きな影響を与えた「阪神間モダニズム」の中心地でした。西宮は文教都市でありながら、いまや一般の住民や子供が西宮の品質の高い文化芸術に触れる機会は特別多くはありません。文化レベルの高い子供たちを育てることは、文教都市だからこそその豊かな教育です。

【教育・子育て②】 日が暮れるまで外で思いきり遊べる環境づくりと子供を大切にするスポーツ・芸術指導

地域活動(ネットワーク)の核である小学校を中心に、学校・行政・地域とその3者をつなぐコーディネーターで、新放課後事業を実現します。子供たちに、オトナに邪魔されず日が暮れるまで安全に思い切り遊べる場所を返してあげたいのです。

スポーツや芸術とのつきあいは、幼少期の出会いや接しかたで決まります。大人になってからも永くスポーツや芸術を楽しめるようになるための教育を実現します。

【津波被害を防ぐ防潮堤の高上げ】

現在、国の新たな見直しにより県は津波被害想定改定の取り組みをしています。現在の被害想定では、近い将来に想定される南海・東南海地震による津波で、JR以南を中心に大きな被害が出ると予想されています。防潮水門をすべて閉めても、防潮堤の高さが足りないために浸水する区域の面積は6km²。そこには8,000棟の住宅があり、47,000人の住民が住んでいます。これは市全体の1割ですので、単純計算すると、14歳以下の子供が7,000人、65歳以上の高齢者が9,400人、うち90歳以上の高齢者が400人含まれることになります。避難訓練も大切ですが、津波が到達するまでの短時間で子供や高齢者や障害者などの災害弱者が、倒壊した家屋の下から安全なところまで避難できるでしょうか（実際に大阪府の被害想定では3割の人が避難行動を起こせな

いと想定されています）。市が対策をとらない限り、津波被害の死者だけでも、阪神大震災の死者数1,146人をこえるおそれもあります。そもそも避難できたとして、「全財産を災害で奪われてまたやり直す」ということを、阪神大震災に続いて、また繰り返すのでしょうか。被害額は、住宅1棟1,000万円として800億円、それ以外に公共インフラの被害もあります。

西の大浜海岸から、東の鳴尾浜までの約21kmの防潮堤のうち、津波を防ぐ高さに満たない部分の延長は11kmになります。防潮堤の補強工事の施工費は1mあたり約10万円、11kmの防潮堤の高上げと、津波の遡上に備えるための武庫川堤防強化の工事をおこなうならば、単純計算で約13億円と試算されます。

また、西宮港沖に不法係留されている土運船も重大な問題です。埋め立て用の土砂を積載し無人で不法係留されている土運船が津波



津波浸水想定区域図

紫色：防潮門扉が全て閉まった場合でも浸水が想定
青色：防潮門扉が全て閉められなかった場合に浸水が想定
黄緑：西宮海岸の防潮堤

で押し流されれば、時速100kmで防潮堤に衝突することになります。この撤去について、市は港湾管理者である県への要望を続けてはありますが、状況は改善されません。

現在の西宮市は、被害想定も対策も県に任せきりで主体的な対応を取ろうとしていません。47,000人と8,000棟を責任を持って守るため、市が自ら事業を企画・推進すべきです。

【ゲリラ豪雨に耐える雨水浸水対策】

今年の大雨は、市内でも観測史上最高の78mm/hを記録し、一部の地域では浸水被害も出しました。都市部の大雨は、突発的で局地的なために予測しにくい「ゲリラ豪雨」の傾向が強まっており、その対策が必要です。

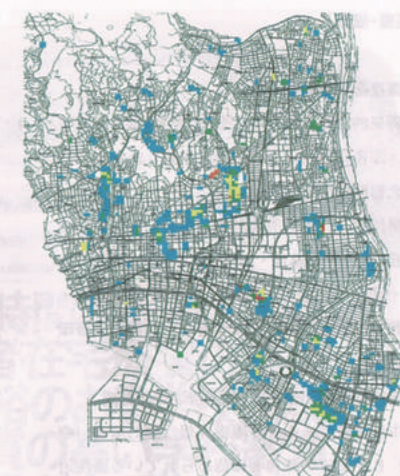
西宮はJR神戸線～国道171号線より北西側が丘になっており、丘から平地への傾斜が急に緩くなるあたりで雨水管を通った水が渋滞し、浸水被害が出やすい傾向にあります。

管渠の整備は6年に1度の降雨（47mm/h）に対する整備を概ね達成していますが、県の所管している雨水の流れ込む河川の整備は、

津門川などはまだ5年に1度の降雨（40mm/h）までしか対応できません。

河川や管渠の整備には時間も経費もかかるため、浸水被害が常襲的に発生する地区から重点的に、管渠の強化と合わせて、雨水を一時的に貯留する施設の整備を進める必要があります。しかし、年間28.6億円（H24決算）の下水道整備費のうち、雨水浸水対策経費はたった3億円。例えば能登運動場地下の貯留施設を1つ整備するのに約1.9億円ですから、3億円ではじゅうぶんな対策を進めることができません。対策強化によって、ゲリラ豪雨に耐えられるまちづくりを進めなくてはなりません。

※32.2m×32.2m・上流の34.47haのエリアの雨水1650㎥を貯留可能



南部地域浸水履歴マップ

平成10年～20年に報告があった浸水被害を50mメッシュにプロットし、浸水発生回数によって色分け表示しています（赤>黄>緑>青）。丘から平地への傾斜が急に緩やかになる「JR神戸線～R171」の箇所と、雨水管から川に流れ込む直前の箇所が雨に対して弱くなっています。

【防災・安全】 南海・東南海地震の津波とゲリラ豪雨から住民を守るまちづくり

「災害だからしかたない」「自分のことは自分で守れ」ですませてよいのでしょうか。港湾や河川などの県が所管している課題について、市は「県に要望する」とするばかりで、自ら主体的な対応を取ろうとしません。

住民の生命と財産を守れずして、何の行政でしょう。安心して住めずして、何の住宅都市でしょう。被災自治体だからこそ、住宅都市だからこそ、安心して住めるまちづくりは、市の大きな責任です。



「どうせ一票じゃ変わらない」って思っていますか？でも、変えられるのは、その「一票」だけなんです。

でも、諦めちゃだめです。私たちの西宮ですから。「誰も投票したい人がいないからなあ…」という人がよくいます。でも、投票は、立候補している人や政党のためにあげる行為ではありません。投票は、自分のためにすることであり、西宮の未来のためにすることです。

「どうせ一票じゃ変わらない」って思っていますか？いいえ。変えられるのは、その「一票」だけなんです。みんながひとしく、「一票」という武器を持っています。大金持ちも、映画スターも「一票」ずつ持っています。そして、私もあなたも、「一票」持っています。さあ、いまこそ「一票」という武器を手にとってください。奥に仕舞い込んだままで埃を被っているかもしれません。サラのままで置きっぱなしかもしれません。特に子供のいる人は、投票に行けない彼らの声も、責任を持って市政に届けてあげてください。投票に行ったら、私たちの西宮を取り戻しましょう。私たちの西宮のために。私たちが愛する西宮を未来に遺すために。

市長選の投票率は33.65%…投票に行くのは3人に1人。

投票に行こう。

昭和47年、西宮に生まれました。食の細い運動が得意なのがコンプレックスでした。仕事が得意で本が好きでした。野球がうまくて足の速い友人たちが私のヒーローでした。足を引っ張るのはわかっていても彼らといっしょに野球をしました。中学に入ってロックに衝撃を受け、部屋に籠もって夜中までギターを弾くようになりました。高校でバンドを組むようになると、講師はちよとした評判になりました。学校を休んで建設現場でバイトをし、楽器を買いました。首からギターを提げてステージに立って怖くはない何事でもありませんでした。何の目的もなく入った大学にはあまり興味を持たず、すぐ退学になりました。進学塾の新学期で算数科講師をし始めてからは、高いプロ意識で生徒に向き合う先輩に憧れ、じゅうぶんすぎる報酬に見合う授業をしようと日々努力しました。夏期講習では過労で吐血しました。

西宮に生まれる。

阪神大震災で罹りました。育った家が焼けたこと、子供のころの写真が一枚もないこと、そんなことはささっと諦めた。自分が持っていたほんの小さな自アに興味津々「惨めな被災者」扱いされたことや、大学教授に「家が焼けただけなんだから試験は受けに来い」と言われたことは心に深く傷を付けた。被災者以外が被災者のことを理解してくれるのではないかと期待した愚かさが情けなくて悔しかった。そんなとき、被災地に来た自衛官と遠くの名前の書かれた消防車に感動しました。日本と地域のためにプロとして日々厳しい任務に就く彼らはきらきらしていました。それまでの私はミュージシャンになりたいと思っていました。でも、日本と地域のために生きたいと思った私は、政治家になることを決めました。家が焼けたって、何があって、びくともしないような誇りに満ちた人生が欲しいと思いました。

被災して政治家を志す。市議選出馬を決意。

日本と地域のために生きる強い男になるために鍛え直してもらおうと、いちばん厳しいと思ったリクルートに入社しました。自分の持っていたほんの小さな自信は早々に粉々に叩き壊されました。これまでやってきた努力は努力とは呼べないのだと知りました。限界まで働けば必ず成果が出るということを知りました。2年目に入ったころ、初めて「市議会議員」に会いました。どうせ偉そうで中身の無い男だろうと思っていた私は、勇気と希望に溢れた「実物の政治家」に感動しました。あまりに悔しいので「俺も次の選挙に出ます」と言うのと「来年だよ」と言われました。やれない気はしませんでした。必要票数は1800票。それは入社して最初の週間で廻った営業先の数と変わらなりました。回転機でチラシを刷って全戸に配り、毎朝駅に立つことになりました。それだけが、支持団体も金もない26歳の私にできる政治でした。

初出馬でトップ当選。

「みんなが選挙に行きたくなくなるような政治がしたい！」と書いたチラシを持って初めて早朝の駅に出ていった日、あまりに誰も受け取ってくれなくて、怖くて家に逃げ帰ってきました。初めてチラシを配った日から電話がかかってきた日、いっしょにチラシを配ってくれていた人が「ほんとうに読んでくれる人がいるんだ」と嬉し泣きました。腹を括って、毎日配り続けたら、連日のように論議の連絡をいただくようになりました。演説をすれば、どこでも立ち止まって聴いてくれる人がいました。意から千切ればばかりに手を振りながら「がんばれ！」と叫ぶおばあさんがいました。選挙最終日、最後の演説をしていたら涙が溢れてきました。夙川駅の前は人だかり。そのまんなかに私はいました。翌日、6157人もの人が、投票にいってくれました。ダントツのトップ当選。私は政治家になりました。

逃走、混乱、そして鬱。西宮市議会を変える。

「初立候補トップ当選」に始まった自分の政治活動をどう扱っていいかわからなかった。飾り立てて大きく見せた自白と現実の自分のギャップに気付かなくて、酔ってました。髪を染め、ピアスをし、それを「あたらしい政治だ」と囁いていました。いっばうで、思い通りにならない政治の現実と自分の幼い幻影とのあいだの溝をどう越えていいいのか、答えが見つからなくなりました。自分の不甲斐なさや現実と理想の差は鬱になり、仕事にも日常生活にも支障をきたすようになりました。苦しい鬱から抜け出すために誰とも連絡を取らず、毎日山に登って座禅を組み、節制をし、読書に明け暮れました。政治とは政治家とは・民主主義とは、放置してきた問題に向き合い、自分の使命に改めて向き合ってきました。もう髪を染めたりピアスをしたりは、いらなくなりました。初当選してから7年も経っていません。

多くの人の政治への期待を裏切った私は、どの政治家よりもはたらかなくてはならなかった。政治家としての使命を改めて受け入れ、政策活動に集中しました。全国で初めて「無防備都市宣言」を議会に論議し、「高校入試複数志願制度」の導入にも大きな役割を果たしました。3期目に入ってからには会派の代表になりました。政策を研究して提案することに加え、会派をマネジメントして議会全体を巻き込んだ政策実現のために活動することや、議員定数削減などの議会改革をリードすることが仕事になりました。議員としての仕事の可能性がまだまだあるのだ、ということを知るようになりました。第3セクターや市立中央病院の放漫経営、恣意的な総合計画の策定など、市政課題に対して議会全体で対峙する状況をつくり出す一方、市長に阿る旧態依然の議員との軋轢も目立つようになり、逃げることもありませんでした。

議会を限界を悟る。

「戦闘開始」は2013年の正月と決めて、それに向けて厳しい活動に耐えられるように身体を鍛え政策をさらに勉強しました。若いころ腕に刺した刺青も削り取りました。いまの私には必要なくなったのでから。賢くもせずに貯めてきたたけななしの全財産を2014年までの活動にすべて費やす計画を立てました。毎朝駅に立ってチラシを配り、毎日40キロ歩いてチラシをポスティングする日々が始まりました。市内各地に向いて声を聞いて政策を書きためました。まちを受取る住民がまちの問題を自らの問題として認識し、そのまちを救うために自ら立ち上がる。これまで奇蹟事だと思って諦められていた政治をこの西宮に実現させる。私は、48万西宮が50年前の西宮のようにその強い意志で西宮を守る選択をすることに何の疑いも持っていません。私の人生はそのためにあったのだと思っていま活動しています。

乾坤一擲の挑戦を決意。



■1972年西宮生まれ 神大附属住吉小〜甲陽学院中〜高〜京都大学法学部(国際政治学・高坂ゼミ)・浜学園講師(算数科)〜(株)リクルート〜1999年より市議会議員
 ■専攻する歴史上の人物: 空海、菅原 自慢できること: 酒と煙草をやめたこと、家事と仕事の両立、節約、節制、手際、体力 断るべきではないもの: 仕事、恋、山、冬、ひとりの時間
 ■好きな言葉: 「塵見五種皆空 度一切皆厄」(すべては相対的なもの、それがわかると、あらゆる苦厄を乗り越えることができる。〜般若心経)
 ■好きな小説: 「悪魔の刺」/「司馬遷太郎」/「血涙」/「北方謙三」 好きな映画: 「ゴッドファーザー part.1」/「ミッション」 好きなマンガ: 「バガボンド」/井上雄彦、『花男』/松本大洋
 ■好きなレコード: 「appetite for destruction」/「ガンズ・アンド・ローゼズ」/「tango zero hour」/「アストル・ピアソラ」